

「私は、メダマアッコウになりたい」

直井 愛来

登場人物

渡井 芹奈 (10) (25) 小学4年生

熊谷 伊織 (10) (25) 小学4年生

田村 実玖 (31) 主婦

渡井 玲子 (37) (52) 芹奈の母

渡井 歩 (7) (22) 芹奈の弟

田村 隼人 (33) 実玖の旦那

戸田 奈津美 (25) 芹奈・伊織の担任

近藤 正隆 (48) プロレス教室の講師

山村 咲子 芹那の勤めるパン屋の店長

南 和希 芹奈の同僚

佐山 菜乃花 芹奈の同僚

小学生1

客

引越し業者

○小学校・4年2組教室内

授業参観の日。

小学生1は教壇に立ち、教室の後ろには保護者たちが並んでいる。

小学生1「私の将来の夢は、ケーキ屋さんになることです。毎年、誰かが誕生日の日には近所のケーキ屋さんに行って大きなショートケーキを買います」

保護者達は微笑んでおり、教室は温かい雰囲気にも包まれている。

小学生1「そのケーキは、イチゴがたくさん載っていて生クリームがふわふわしていてとってもおいしいです。そのケーキを食べると家族全員が笑顔になります。私もいつかみんなを笑顔に出来るケーキ屋さんになりたいです」

教室は拍手に包まれる。

渡井芹奈（10）、窓際の席に座り外を眺めている。

小学生1は教壇から降り、自分の席に戻る。

戸田奈津美（25）は、拍手が途切れる最後まで拍手を続けている。

戸田「はい、ありがとうございました。では次は、渡井さん」

芹奈「（聞こえていない）」

戸田「渡井さん？」

芹奈「（気づいて）あ、はい」

芹奈、浮かない顔で席を立ち、教壇へと歩きだす。

教壇に立ち母を探すか、いない。

芹奈「…私の将来の夢。4年2組、渡井芹奈。

私の将来の夢は、ありません」

教室がざわざわと騒がしくなる。

芹奈「そもそも、人は何かにならなくてはならないのでしょうか。小学生の時の夢を今でも覚えている大人はどれくらいいるのでしょうか。以前戸田先生に、人間はなぜ生まれてきたのかと聞くと、生まれ

てきた意味はないと言いました。けれど、
今度は将来の夢は何かと聞いてきます。
生まれてきた意味はないのに、夢がない
とおかしいようです。人間みな誰しも夢
に向かって一生懸命生きなくてはならな
いのでしょうか。目標がないといけない
のでしょうか。将来の夢という作文を書
くということは、子供は誰しも夢を持た
ないといけないという強迫に思えます。
以上です」

再びざわつく教室。

戸田は、静かにするよう大きな声で喚
起している。

熊谷伊織（10）、気にしていない様
子でノートに何かを書いている。

芹奈、自分の席に戻り、作文を適当に
折り曲げて引出しに入れ、再び外を眺
めている。

○同・図書館

お昼休みの時間。

窓際の席に座り、本を読んでいる芹奈。入り口のドアが開き伊織が入って来る。

芹奈、振り返ると、伊織と目が合い、お互い気まずそうな顔をしている。

伊織、芹奈とは少し間隔を離して席に座り、ノートに何か書き始める。

伊織「昼休みなのに遊ばないの？」

芹奈「なんで昼休みだからって遊ばないといけないの？」

伊織「…別にどっちでもいいんだけど」

芹奈「そっちも遊んでないじゃん」

伊織「…」

芹奈「ちよつと。無視しないでよ」

伊織「作文、先生に怒られなかったの？」

芹奈「怒られたよ。当たり前じゃん」

伊織「じゃああんなの書かなきゃいいのに」

芹奈「そう思うんだから仕方ないじゃん」

伊織「へえ。本当にそう思ってるんだ？」

芹奈「なに？」

伊織「将来の夢を持っても意味ないって。本当にそう思ってるんだ」

芹奈「意味ないとは思ってないよ。でも、絶対必要だとは思ってない」

伊織「なんで？」

芹奈「だっておかしいじゃん。いつの間にか私たちって生まれてて、気がついたら人間としての人生がスタートしてて、まだ生きる覚悟も意味もわかってないのに夢を持ってって、無理があるでしょ」

伊織「覚悟も意味も必要なのかな」

芹奈「私には必要なんだよ」

伊織「…ふーん」

伊織、再びノートに目を移す。

○小学校・昇降口（夕）

校内の昇降口前は、帰りを急ぐ生徒たちで賑わっている。

友達と一緒に帰る子どもたちが多い中、芹奈はひとりで黙々と歩いている。

○渡井家・玄関くリビング（夜）

玄関のドアが開き、芹那が入ってくる。

芹奈「ただいまー」

返事はなく、静寂が漂う玄関。

*

リビングでは、渡井玲子（37）がソファに横になって寝ている。

芹奈、リビングに入って来る。

玲子を見つけると、またか、というため息をつく。

芹奈「（玲子の体をゆすりながら）お母さん、起きて。ここで寝ないで」

玲子「（寝ぼけながら）芹奈もう帰ったの？」

芹奈「ここで寝たら風邪ひくよ」

玲子「（目を覚し）はあ、もうこんな時間？」

「ご飯適当でいい？」

玲子は気怠そうにキッチンへ向かう。

近くには、プロレス選手と家族4人が記念撮影をした写真が飾られている。

芹奈、暫くその写真を見つめている。

*

玲子、芹奈、ダイニングテーブルにつき夕食を食べている。

芹奈「今日は出てきた？」

玲子「今日？」

芹那、2階を指差す。

*

子供部屋。

渡井歩（7）、大音量でテレビゲームをしている。

*

玲子「…出てきてない。トイレ行くくらい」

芹奈「…お父さんは？」

玲子「今日も遅くなるって」

芹奈「そっか」

玲子「今日はごめんね、行けなくて。やっぱり仕事抜けられなかった」

芹奈「いいよ。大したことはないし」

玲子「そう。あんたは案外ちゃんとやってるもんね、あの子と違って」

芹奈「…まあ授業参観って子供が親に勉強してる姿を見せるというより先生が保護者にどれだけちゃんと仕事してるかを見せつける方が大事だから」

玲子「相変わらず捻くれてるわね」

芹奈「それほどでも」

玲子「褒めてないわ。…けど、姉弟2人ともおかしな子だったらお母さん耐えられなかった。あんたがまともで良かったわ」

芹奈「…」

玲子「なんで周りの子と同じように出来ないんだろ。どこで間違えちゃったんだろ」

芹奈「（小声で）ちゃんと学校行ってるからってまともって訳じゃないけど」

玲子「なに？」

芹奈「別に。これもういらなない」

玲子「こら、ちゃんと食べなさい」

芹奈「ごちそうさま！」

雑に箸を置き、リビングを出る芹奈。

○小学校・4年2組教室内（夕・日替わり）

黒板に「日直 渡井芹奈」、と。

○同・職員室・入り口付近

芹奈「先生、学級日誌取りに来ました」

戸田が顔を出す。

戸田「あーはいはい。ちょっと待ってね」

戸田、手元の仕事を一時中断し学級日誌を芹奈に手渡す。

戸田「渡井さん、作文の再提出はまだ？」

芹奈「すみません。まだです」

戸田「（嘲笑って）次はせめて何になりたいかだけは書いてよ？」

職員室にいた先生たちも一緒になって笑い、芹那は居心地悪くなっていく。

芹奈「すみません、自分がまだ何になりたいか分からないので。自分に適している仕

事なのか、好きになれる仕事を見つけるべきか…」

戸田、ふっと笑う。

戸田「あのね、これは渡井さんを思ってたのアドバイスなんだけど。渡井さんって大人ぶったことを言う癖があるじゃない？」

芹奈「…えっ？」

戸田「渡井さんはまだよく分かってないと思うけど、大人になるとね、渡井さんみたいに生きる意味とか考えなくなるの。あるのは、ただ働かないと生活できないっていう現実だけ。分かる？ 大人になるってそういうことなの。だから今だけなのよ、自由に将来を考えられるのは。だから変に大人ぶらずに思ったこと書けばいいんじゃない？ ね？」

芹奈「思ったこと…」

戸田「そう。書いたら先生に見せてね、来週までよ。じゃあ頑張っってね」

職員室のドアがしまる。

その場に立ちつくしている芹奈。

○同・教室

芹奈、教室に入って来る。

伊織、席でノートに何か書いている。

芹奈「まだ残ってたんだ」

伊織「うん。そっちも？」

芹奈「私、今日日直だから」

伊織「そっか」

芹奈、伊織よりも後ろの席に座る。

芹奈「ねえ、今日の1時間目って何した？」

伊織「忘れた」

芹奈「…えっと確か国語っつと」

芹奈「2時間目は家庭科だったけ？」

伊織「分かんないけど、たぶんそう」

芹奈「（小声で）適当かよ」

伊織、集中した様子で書き続けている。

芹奈、気になり始め遠くから覗こうと

するが何も見えない。

芹奈、ゆっくりと伊織に近づいていき、
ノートの中身を確認する。

芹奈「…漫画？」

伊織「（驚いて）ちよつと！ 見ないでよ」

伊織、慌ててノートを引出しにしまう。

芹奈「隠すことないじゃん！ 上手いんだね」

伊織「別に上手くないよ」

芹奈「上手いよ！ もっかい見せて！」

伊織「やだって」

芹奈「なんで？ お願い誰にも言わないら！」

伊織「…本当に？」

芹那「本当に！」

伊織「…しょうがないな。ちよつとだけだよ」

芹奈「やった！」

伊織、芹奈にノートを差し出す。

ぺらぺらと読み始める芹奈。

その様子を緊張して見守る伊織。

芹奈「これって友情系の漫画なの？」

伊織「ジャンルとかは分かんないけど…この二人の女の子を描いてるのがなんか楽しいんだよねってもういいでしょ返して！」

伊織「ノートを取り上げようとする。」

芹奈「（伊織をかわして）待って、まだ読んでもるから！」

伊織「どうせつままないって言うでしょ」

芹那「そんなことないよ！ 何て言ったらいいかわかんないけど…私、熊谷さんの漫画好きだよ」

伊織「…なにそれ。適當すぎ」

芹奈「本当だよ。他にもあるの？」

伊織「え？」

芹奈「だってこれ途中からじゃん。その前の話もあるんでしょ？」

伊織「あるけど…」

芹奈「見せて！ いつ見せてくれる？」

伊織「えーじゃあ…」

芹奈「（目を輝かせて）うん！」

伊織「…今から家、来る？」

○伊織の家・伊織の部屋

芹那は、急いでランドセルを下ろす。
本棚がいくつもあり、ほとんどが漫画
で埋め尽くされている。

芹奈「すごい漫画の量だね！」

伊織「別の部屋にはこれの倍の数あるよ」

芹奈「えっ？　：すごいね」

伊織、勉強机からノートを取り出す。

伊織「（ノートを差し出し）これ、一話目か
ら書いたやつ」

芹奈「ありがと！　読んでいい？」

伊織「良いよって言わなくても読むくせに」

芹奈「（笑って）もちろん！」

ノートを読み始める芹奈。

伊織、ノートをのぞき込み2人で読み
始める。

時々、顔を合わせて笑い合う2人。

*

芹奈「この2人、何回も喧嘩するのに絶対仲直りするんだね」

伊織「そうだよ。友達ってたぶんそういうものだから」

芹奈「ふーん。ねえ、この主人公のサトミちゃんって熊谷さんに似てるね。なんていうか、適当で冷たいところとか」

伊織「なにそれ。それをいうなら、ミサキは渡井さんに似てるよ。性格ひん曲がってるところとか」

芹奈「ひどい！でもそれちよっと思ってた」
伊織「思ってたんかい！」

芹奈「じゃあ、今日から私はミサキちゃんで、熊谷さんはサトミちゃんね！」

芹奈「なにそれ。どういうこと？」
芹奈「（笑って）今日から友達ってこと！」

○帰り道（夜）

伊織「遅くなってる、家の人心配しない？」

芹奈「大丈夫。うち親忙しいから。それに親は私の心配とかしてないし」

伊織「…そうなの？」

突然立ち止まる芹奈。

芹奈「もうここで良いよ」

伊織「いいの？ 家まで送るよ？」

芹奈「もうすぐそこだから。今日はありがと」

伊織「…」

芹奈「どうしたの？」

伊織「あのさ」

芹奈「なに？」

伊織「私もあれから考えたんだけど」

芹奈「なんだっけ？」

伊織「将来の夢のこと」

芹奈「あーあれね。もういいよ。ごめん、深く考えてもしょうがないことだね」

伊織「やっぱり私には意味も覚悟も必要ないみたい」

芹奈「どういう事？」

伊織「考える暇もないくらい私にはこれしかないの。漫画を描いてる時だけ自分らしくいられるの。漫画を描くことが生きていく意味なのかも。大袈裟かもだけど」

芹奈「…」

伊織「ごめんね、変なこと言って！　じゃあ、また明日学校でね！　バイバイ！」

走って帰っていく伊織。

芹奈、その場に立ち尽くしている。

○道中・街灯下（夜）

歩いている芹奈。

芹奈（M）「私がおかしいのかなってずっと思っていた。生きる意味も、目的も考えずに生きていけたらどれだけいいだろうって。どれだけ楽だろうって」

○自宅前

自宅に到着していることに気づく芹奈。

芹奈（M）「けど、私はすでに考えてしまっ
ていて、もうすでにこっち側の人間なわ
けで。あっち側の人間には、もうなれな
いんじゃないかって。それでも、少しで
も望みがあるなら早くあっち側のキラキ
ラした世界に行きたいって、そう思っ
たのに。そう思えば思うほど私の中の
何かがから回って、消えてしまいたくな
るような、逃げ出したくなるようなそん
な気持ちでいっぱいになって、私は：」

自宅の玄関のドアノブに手を掛けるが、
入ることを躊躇っている。

芹奈（M）「私は本当に逃げ出してしまった」

芹奈、何かを振り切るように走り出す。
足元がクローズアップされる。

○道中（朝）

15年後。

走っている足元がクローズアップ。
視点が上昇し芹奈（25）の焦る表情。

人混みをかき分けながら走っている。

○パン屋・入り口・中（朝）

勢いよく入ってくる芹奈。

芹奈「すみません。遅れました」

山村「はい。今日で通算58回目ね」

芹奈「この前のは間に合ってますから。57

回目ですから」

山村「変わらないから。早く着替えてきて」

芹奈「はい。すみません」

小走りで裏へと向かう芹奈。

*

芹奈、レジの前に立っている。

山村は、忙しく作業している。

芹奈「で、昨日寝れなかったのだからためになる

雑学集っていう動画を見てたんですけど。

人って一生のうち寝てる間に10匹以上

の蜘蛛を食べてるらしいんですよ」

山村「為にならないし、気持ち悪いよ」

芹奈「人生100年だとすると確率的にはもう2匹以上食べてますよね。店長は：何匹食べました？」

山村「そんな質問されるくらいなら直接年齢聞かれた方がマシなんだけど」

客が入店する。

芹那「いらつしやいませー」

客、部屋着のままパンを物色している。

カレーパンとあんぱんをトレーに入れレジに持ってくる。

芹那「袋入りますか？」

客「あ、お願いします」

芹奈、パンを袋に入れてていく。

*

芹奈「ありがとうございました」

芹奈、店を出た客を店内から見ている。

客は袋からカレーパンを取り出し徐に口に入れる。

芹奈「分かるなあ」

山村「何が？」

芹奈「買った時は家で食べようと思って袋も
らうんだけど結局出来立ての食べたくな
ってお店出てすぐ食べちゃうんですね。

（山村に）ありますよね？」

山村「行儀悪いよ」

芹奈「大体の食べ物に行儀悪く食べた方が美
味いですよ」

山村「芹奈ちゃんもお客さんも衝動的だよな。
あの流行ってる→とか☪とか←とかの、
あれに当てはめたら：何なのかね」

芹奈「MBTIすか」

山村「そうそれ」

芹奈「マはないっすね」

山村「なんでも計画性よ。芹奈ちゃんは仕事
真面目だけど欠勤と遅刻が多いのよねえ」

芹奈「すみません。今日はなんか仕事する気
になれないなあって日が続いちやっつて」

山村「それ、ここなら許されても就職した時
にそれじゃ困るでしょ」

芹奈「いや、就職する気ないんで」

山村「就職しないで一人でどうやっていくのよ。そうやって後先考えずに動いてると後悔するわよ」

芹奈「人生に計画って必要なんですかね」

山村「人生って、どうしてそういつも大きく捉えるのよ、まだ若いんだし就職先なんていくらでもあるでしょ」

芹奈「若いってなんなんですかね」

山村「あなたは、本当になんでも難しく考えるのが好きなのねえ」

芹奈「いや好きとかではないですけど」

山村、「はいはい」などと言いながら作業に戻っていく。

スマホにLINEの通知があり、伊織から「やっと脱稿した！今日家来るでしょ？」「とある。
すぐに「お疲れ！ 牛丼買ってく！」「と返信する。

○伊織の家・中（夜）

伊織（25）、牛井をかき込んでいる。

伊織「カルビチーズ丼うんつま！」

芹奈「お疲れ様。今回のできはどうぞよ」

伊織「いい感じ。担当者の反応も良かったし」

芹奈「やったじゃん。ね、あとで見せてよ」

伊織「完成したらね」

芹奈「そう言ってほとんど見せてもらったこ

とありませんけど」

伊織「そうだっけ」

芹奈「昔はもっと見せてくれたのにな」

伊織「まあ、今年は絶対取るよ、新人賞」

芹奈「おお、強気だね」

伊織「まあね。芹奈は？ 仕事どんな感じ？」

芹奈「私の話はいいよ。変わり映えしないし」

伊織「でも今の仕事は続いている方じゃない？」

芹奈「今のところはね」

伊織「前のところはなんで辞めたんだっけ？」

芹奈「休みの間に旅行行ってお土産買ってい

かなかったら普通買ってくるでしょって

言われたから」

伊織「なにそれしようもないね」

芹奈「しようもないよ。なんで休みの日にも仕事のこと考えなくちゃいけないの。休みは休むもんでしょ」

伊織「あんたが一人で野垂れ死んでる未来が見えるわ」

芹奈「どうせ野垂れ死ぬならタヒチがいいな」
黙々と牛丼を食べ進める芹奈。

芹奈の顔を呆れた顔で見つめる伊織。

*

こたつでくつろいでいる2人。

芹奈「だから、その計算でいうとうちのばあちゃんすでに蜘蛛7匹食べてんだよね。

怖くない？」

伊織「なんで嬉しそうなのよ」

芹奈「あ、そういえばなんか欲しい物ある？」

伊織「え、なに？　なんか買ってくれんの？」

芹奈「何もないのに買ってあげるわけないじゃない。来月伊織の誕生日でしょ」

伊織「え。今何月？（カレンダーを確認して）

うわもう3月じゃん、はっや！」

芹奈「早いよねえ」

伊織「∴私来月、25？」

芹奈「そうだね、お祝いしよーよ」

伊織「お祝いかあ∴。（笑って）25歳のお

祝いはもうあんまり嬉しくないかも。だ

ってもう30歳目前じゃん」

芹奈「えー去年はそんなこと言ってなかった

のに急にそうなる？」

伊織「24と25はなんか違うじゃん。25

歳って漠然と不安にならない？ 自分は

このままでいいのかなって思ったり何か

を変えなくちゃいけない気がしたり、そ

んな気しない？」

芹奈「うーん。∴そういうもんなのかなあ」

○芹奈の家・リビング（朝・日替わり）

バイトに行く準備をしている芹奈。

ついているテレビ、ニュースで日本人の野球選手がメジャーリーグの試合でホームランを打ったと報道している。テレビのコメンテーター「まだ25歳という若さでこの活躍は、今後の活躍も期待できそうですね」

○芹奈の勤めているパン屋

レジ前で暇そうに立っている芹奈。

和希、菜乃花がフロアに出てくる。

和希「あれー芹奈じゃん！ やめたのかと思つたよ、この前お客さんにスコーンぶつけてたのにクビになんなかったんだ」

芹奈「おお、久しぶり」

菜乃花「相変わらずテンション低いね。人生は有限なんだから明るく生きないともつたいないよ！」

芹奈「有限なんだから明るく生きようと暗く生きようと自由にさせてよ。あなた達はいつにもまして元気ね」

和希「分かる？ 実は婚約したんだよね」

芹奈「え、婚約？」

菜乃花「私は彼氏できました」

芹奈「は？」

和希「半年前に付き合ったばかりなんだけ

ど、もう年齢考えたら若くないかもって」

芹奈「若くないって幾つだっけ？」

和希「今年26」

芹奈「まだまだ若いじゃん！」

和希「まあ年齢で言ったら若くないかもだけ

ど、私みたいな何の資格もないような人

間は早めに地に足つけとかないと。芹奈

もちゃんと考えなくちゃだめだよ」

芹奈「はあ…」

○公園・ベンチ

お昼休みの時間。

芹奈と山村、ベンチに座っている。

芹奈、パンを次々と口の中に放り込んでいる。

芹奈「（頬張りながら）私って、自分で言うのもあれですけど良い意味で自由な性格っていうか。自分以外どうでもいいって思ってたんですよ。けど最近、周りの変化に自分がついて行けていけない感じがするっていうか。そもそも、結婚適齢期って誰が決めたんですかね。自分の人生に何をするかなんて自分自身で決める事なのになんで適齢期ってものがあるんですかね」

山村、芹奈の食い意地にやや引き気味の様子。

山村「まあ、生きている人には常に先人がいるからね。先に生まれた人は後から生まれた人にアドバイスをしたくなるものよ」

芹奈「何それ、超迷惑ですね」

山村「（笑って）確かに迷惑ね。人間っていつの時代も試されているのかもね。周りの意見に惑わされず自分の本心で選択し行動できるのか」

芹奈「自分の本心か。いつも自由な選択ができて自由に生きればいいのにな」

山村「何言ってるの。みんな生まれてからずっと自由よ。正解を求めてしまうから難しいんじゃない」

目の前で幼児が派手に転んで大泣きしており、母親が来て抱き抱えていく。

芹奈「そういえば、小谷は自分の選択を間違えたと思ったことはないんですかね」

山村「ああ、野球の」

芹奈「ああいう成功してる人って、常に目標があってそれにブレずに行動できているから成功してる訳じゃないですか。一回でも辞めたいとか思ったことないのかな？（考えて）いや、あるのか？」

山村「どうなんだろうね。昔から目標あってブレずに生きている人がいれば聞いてみたらいいんじゃない？」

芹奈、「うーん」と言いながら次のパ
ンに手をのばそうとする。

山村、その手を阻止し。

山村「いやそれ私の」

芹奈「…えっ？」

○伊織の家・中（夜）

伊織「辞めたいって思ったこと？ そんなの

しよっちゆうだよ」

芹奈「（驚いて）え、そうなの？」

芹奈と伊織、また牛丼を食べている。

伊織「まあ、私は売れてないから成功してる人とは違うかもしれないけど。漫画がつまらないってSNSで批判されたりやつと決まった連載がすぐ打ち切りになったりした時は辞めたいなって思ったよ」

芹奈「そうなんだ」

伊織「でも私はこれしかやってこなかったから他に出来る事ないし。だから、時々芹奈が羨ましいよ」

芹奈「私が？ なんで？」

伊織「これから会社に勤めようと思えば正社員にだってなれるでしょ。でも私は社員になったことないし今の仕事諦めて就職するなんて出来そうにない。漫画だけでこの先も食べていけるのかなって考える時はあるよ」

芹奈「いやいや、私には何にもないよ」

伊織「何にもないから羨ましいんだよ」

芹奈「…何もないから、か」

伊織、ゴミを片付けキッチンに移動する。

伊織「だから芹奈もさ、いつまでもバイトじゃなくてちゃんと働きな。なんだってやれるんだから」

芹奈「…（小声で）なんだってやれるのが一番怖いんじゃない」

伊織「なんか言った？」

芹奈「なんでもない」

○本屋・レジ付近（日変わり）

漫画を持ってレジに並んでいる芹奈。

話題の本コーナーに『好きなことを仕事にする方法』というタイトル本が目に入る。

芹奈、暫くその本を見つめている。

店員の声「次のお客様―？」

芹奈、迷いつつその本を取り。

芹奈「あ、これもお願いします」

と、レジに本と漫画を出す。

○伊織の家・作業部屋（夜）

原稿を書いている伊織の背中。

伊織「ラスト、最後の1ページ！」

描いている伊織の筆が止まる。

伊織「ついに、終わった―！」

と、そのばに倒れ込む。

伊織「（涙目になりながら）お疲れ、自分」

スマホから着信が鳴る。

伊織「もしもし」

担当者の声「あ、熊谷さん？ 今月のやつ見

ましたよ。良い感じじゃないですか。他

の担当者にも見せたんですけど好評でしたよ」

伊織「本当ですか。嬉しいです。あ、今新人賞に出す作品も描き終えたところです」
担当者の声「熊谷さんノッてますからね。もしかして新人賞獲るんじゃないですか」
伊織「いやいやそんな、まさか。あ、はい。ではまた来週。失礼いたします」
電話を切り、ガッツポーズする伊織。

○街中・郵便ポスト前

伊織、一呼吸ついでから封筒をポストに投函する。

伊織「どうか、どうかお願いします」
と、手を合わせる伊織。

○出版社・中（日替わり）

伊織、作品を出版社に売り込んでいるが、担当者は首を横に振っている。

*

再び熱心に作品を売り込んでいる。

しかし、担当者は呆れながら席を外す。

○出版社・外（夜）

悔しそうに出版社を出てくる伊織。

仕方ないという表情で前を向く。

○伊織の家・玄関くりビング（夜）

伊織、疲れた表情で玄関に座り込む。

力を振り絞ってリビングへと移動する。

あ、と何かを思い出しすばやくスマホを取り出す。

SNSをチェックすると、自分の連載への不評コメントが並んでいる。

その中に『才能ないのに、なんで続けるんだろう。辞めた方が幸せでしょ』というコメントを見つけ落胆する。

○芹奈の勤めているパン屋・中（朝）

芹奈、レジに立ちながら店の入り口から通勤中のサラリーマンを見ている。

芹奈「みんな私よりずっと価値がある人間ですよね」

山村「なーに言ってるの。人間の価値なんて自分で決めるもんじゃないわよ」

芹奈「店長、それは綺麗事ですよ」

LINEの通知音が鳴る。

伊織から、「今日新人賞の結果が出る。また入賞してなかったらどうしよう。」とある。

芹奈、すぐに返信の文を打つ。

「今回は自信あるんでしょ？ 絶対

大丈夫だよ！」と返信する。

すぐに既読がつくが返信は来ない。

○同・外（夜）

芹奈、和希と菜乃花と軽く談笑した後、手を振り家路に向かう。

スマートフォンを確認するが、伊織からの返信はない。

○伊織の家・ドア前→作業部屋（夜）

チャイムを鳴らす芹奈。

返答はなく、部屋は静まり返っている。

芹奈「伊織？ いるのー？」

伊織からの返答はない。

芹奈、玄関のドアを開けると、鍵がかかっている。

芹奈、そのまま中に入る。

芹奈「伊織ー？ 入っちゃうよ？」

恐る恐る部屋に入っていく芹奈。

作業部屋を覗くと、伊織が机に座っている。

芹奈「伊織？ 大丈夫？ 鍵開いてたから勝手に入ってきちゃった」

伊織は黙り続けている。

芹奈「…結果、どうだった？…（明るい声で）
また伊織が好きな牛丼買ってきちゃった。今日は卵も付けちゃったよ！ 食べるでしょ？」

伊織「…」

芹奈「あ、もしかしてもうごはん食べちゃった？ ごめんね、デザートとかの方が良かったよね。今から買ってこようか」

伊織「…落ちてた」

芹奈「…えっ」

伊織「佳作にも、どこにも私の名前なかった」
伊織のそばには少女向けの週刊誌が置かれていた。

芹奈「…そっか。ダメだったか」

伊織「…」

芹奈「今回一番気合入ってたのにね。今までで一番伊織が楽しそうに描いてたからなんかうまくいく気しちやってたよ」

伊織「…」

芹奈「審査員見る目ないんじゃない？ 伊織の作品がつまんないわけじゃないじゃん」

伊織「…」

芹奈「…まあ今年はさ、ダメだったけどさ。また頑張ればいいじゃん。また来年…」

伊織「あんたに何が分かるの？」

芹奈「…え」

伊織「あんたに何が分かるのよ」

芹奈「…伊織？ どうしたの」

伊織「また来年って、毎回今年で最後って、

これ以上もう何も思いつかないってくら

い考えて考えて必死で描いてんのに！

また来年、この一年と同じように苦しま

なくちゃいけないわけ？」

芹奈「いや違うよ。そんなつもりじゃ…」

伊織「来年なんてないの。次の事なんて考え

る暇なんてないの！ 毎日必死なの。そ

れぐらいの気持ちでやらなきゃ誰にも認

めてもらえないの。そういう世界なの！」

芹奈「伊織、ごめん。ごめんなさい」

息が切れている伊織。

伊織の目には涙があふれている。

伊織「…どうせ芹奈も笑ってたんでしょ」

芹奈「…え？」

伊織「みんなみたいに、なんで才能ないのに
続けてるんだって笑ってたんでしょ」

芹奈「そんな：そんなはずないじゃん！」

伊織「私だって分かったよ。才能がないこ
とくらい。それでも、漫画が好きだから
：私にはこれしかないから：漫画だけは
諦められないから：」

声を殺して泣いている伊織。

芹奈「伊織、私は伊織を馬鹿にしたことなん
て一度もないよ。伊織は私にとって：」

伊織「（話を遮って）帰って」

芹奈「伊織！ 私は：」

伊織「：帰れ！」

伊織の声に驚いて、すぐに荷物を持っ
て伊織の家を出ていく芹奈。

ドアが、バタンと閉まる。

静寂が漂う部屋に、伊織の泣き声が響
いている。

○同・作業部屋（日替わり）

泣きはらした目の伊織。

少女向け週刊誌を手に、新人賞を受賞した作品を読んでいる。

伊織「…これは…」

読み終えた伊織の目には悔しさとは別の涙が流れている。

すぐにスマホを取り出して、何かを調べ始める。

伊織、メッセージを作成している。

『突然すみません。漫画家志望の熊谷と申します』と入力し、送信する。

○ファミレス・中（日替わり）

4人掛けのソファ席。

伊織と田村実玖（31）が向かい合わせに座っている。

実玖は緊張した表情で、俯いている。

実玖「えっと…あの…そのご用件は…」

伊織「正直」

実玖「（顔をあげて）はい？」

伊織「正直、めちゃくちゃ面白かったです」

実玖「えっとあの、漫画の、話ですよ」

伊織「そうです。それ以外に何かあるっていうんですか」

実玖「そうですね、すみません」

伊織「私あんまり友達いなかったんで、友達がいない女の子が努力して仲間の輪に入ろうとする系の話に弱いんです。正直、ドンピシャでした」

実玖「え、あ、ありがとうございます：、実は私も学生時代友達がいなかったの：その、一緒ですね：（へへへ、と笑う）

伊織「何が面白いんですか？」

実玖「：すみません」

少しの間。

伊織「今までもこういうジャンルの漫画を描いてきたんですか？」

実玖「今まで、ですか？」

伊織「はい。新人賞取る前はどんな作品描いてたんですか？」

実玖「えっと、実は今回が初めてでして…」

伊織「はい？」

実玖「漫画を描くことが今回初めてなんです」

伊織「え、…初作品がこれで、初めて投稿し

て新人賞を取ったってことですか…？」

実玖「いや、はい、まあそうなりますかね…」

伊織「そうなりますかねって…」

実玖「私もすごくびっくりで。まさか取ると

は思ってたなかったの。でも小さい頃か

ら絵だけは好きで、高校も美術を専攻し

て進学したんですが絵だけで食べていく

のは厳しいと思っ、そのまま普通に就

職して、結婚して…でも産休中にちよっ

と書き出したら楽しくて、せっかく描い

たのに捨てるのはどうかなと思いまして

今回投稿した、という感じですよ」

伊織「全くの初心者ってことですか？」

実玖「あ、はい。そうです」

伊織「うそでしょ…」

実玖「はい、ほんと、びっくり…」

伊織「…なるほど。分かりました。分かりませんけど！ 分かりました。それでこれからはどうするんですか？ どんな作品描きたいとか」

実玖「えっと…実は…」

伊織「…なんですか？」

実玖「漫画はこれで最後にしようと思ってるんです」

伊織「は？ どういう事？」

実玖「先程も申し上げましたが、私結婚して子供がいるんです。子供もまだ1歳にもなっていないので育児におわれてそれどころじゃなくて…漫画なんてそんなのもつてのほかです」

伊織「なにそれ、じゃあデビューできる道があるのに諦めるってこと？」

実玖「（俯いて）…そう、ですね」

伊織「なにそれ。そんなの許さない。あんた新人賞舐めてんの？ 何年も何年もそれ

だけが欲しくて努力してる人がたつくさ
んいるのにあんたそれ簡単に手放すの？」

実玖「…私だって！ 手放したくなんかありません。でも、もう私だけの人生じゃないんです。子供や夫の為に働かなくちゃいけないんです。パートに行って家事をしながら育児して、旦那が帰ってきたら晩御飯の用意をして。あなたは若くてまだなんだってできるかもしれないですけど、私はもう31歳なんです。もう夢を追いかけられる年齢じゃないんです！」

お互い息を切らし、にらみ合っている。

伊織「ふざけんな」

実玖「…え？」

伊織「そんなの全部言い訳じゃん。結局いろんな理由付けて逃げてるだけだよ。本当に欲しかったらそんな理由で手放したりしない。年齢とか主婦だからとかそんな真っ当そうな理由で自分が好きなことやって失敗するのが怖いんだよ。あんたは

好きなことに裏切られるのが怖いだけな
んだよ！」

伊織、財布から千円を机に置いてフア
ミレスを出ていく。

驚いた顔で呆然としている実玖。

○道中

イライラしながら歩く伊織。

人とぶつかるも、謝らずに無言で去る。

○実玖の家・リビング・中

リビングの扉が勢いよく開く。

実玖「ごめんなさい！ 遅くなっちゃった！」

田村隼人（33）、泣いている赤ち

やんを抱いている。

隼人「ごめんねじゃないよ。遅すぎ。自分の

子供放っておいてどこ行ってたんだよ」

実玖「ごめんごめん、何か食べさせた？」

隼人「いや、教えてくれないと分かんないし」

実玖「そうだよね、ごめんね」

また赤ちゃんが泣き出す。

隼人、実玖に預けてその場を離れる。

必死であやしている実玖。

○芹奈の勤めているパン屋・休憩室（日替わり）

スマホで新人賞の結果を見ている芹

奈、ふう、と大きなため息をつく。

後ろから近づく和希と菜乃花。

和希「せーりーなーちゃん（肩を叩く）」

芹奈「（驚いて）わ！ な、なに？」

菜乃花「今日暇？ 暇だよね？」

芹奈「いやどちらかというとめちやくちや忙

しいかな」

和希「今日ちよつと行きたいところあるんだ

けど、来るよね？」

芹奈「いや今日は…」

菜乃花「（食いぎみに）来るよね？」

芹奈「い、行きまーす」

○プロレス教室・中（夜）

派手なプロレスのコスチュームを着ている芹奈。

芹奈「いやいや！ なにこれ、なにがどうなっ
てこうなった？ 誰か説明して！？」

和希、菜乃花、ジャージ姿で芹奈を
見て笑っている。

菜乃花「いやね、最近近くにプロレス教室が
できたの知ってどうしても行きたいって
この人が（和希を指さす）」

和希「実は私、プロレスのファンで、という
か正確には母親が好きだったんだけど、
私も行きだしたらハマっちゃって！」

芹奈「いやそれは分かるけどなんで私が着て
んの！？ あんたが着なよ」

和希「いや本当は着たいよ？ でもなんだから
最近芹奈の元気がないみたいだったから
さ。派手なコスチューム着たら元気が出
るんじゃないかなって、ねー（菜乃花と
目を合わす）」

菜乃花「ねー」

芹奈「気にしてくれてたの…？　ありがとう」

和希「どういたしまして！」

近藤正隆（48）、奥で準備している。

近藤「あの！　体験の方こちらへどうぞー！」

和希「あ、呼ばれたみたいだよ！」

菜乃花「急げ急げ！（芹奈を引っ張る）」

芹奈「（引っ張られながら）え！　なにになになになになにに！？」

○芹奈の家・寝室

足腰を痛そうに押さえながらベッドに横になる芹奈。

芹奈「いててて。あいつら、覚えとけよ…」

そばには、プロレス選手と家族4人で撮った写真が立てかけられている。

写真立てを見つめて。

芹奈「プロレスか…」

○実玖の家・寝室（早朝・日替わり）

赤ちゃんの泣き声で目を覚ます実玖。

実玖、赤ちゃんを抱きかかえる。

実玖「（優しい声で）よしよし、おはよう」

隼人もベットから起き上がる。

隼人「なにしてんだよ。朝からうるさいよ！」

実玖「…ごめんなさい」

赤ちゃんの泣き声が大きくなる。

実玖「ごめんねーよしよし大丈夫だよー」

○同・居間（昼下がり）

赤ちゃんを寝かしつけた実玖、赤ちゃんを起こさないように静かに寝室の扉を閉める。

ふう、と大きいため息をつく。

実玖「よし、次は掃除！ 頑張ろう！」

*

リビングの掃除をしている実玖、誤って書類の山を倒してしまう。

実玖「うわ、やっちゃったー（何かに気づいて）ん？」

その中には漫画（『少女日記』の5巻）が混ざっていた。

実玖「懐かしー！ 何でここにあるんだろ？」
パラパラと読む実玖。

実玖「（集中している自分に気づいて）だめだめ、掃除しなくちゃ」

○同・書斎

実玖、『少女日記』がある棚を見つけて、漫画をしまう。

実玖「なつかしいなあ……」
本棚にある自分の漫画を眺める実玖。

*
〈フラッシュバック〉

怒りを堪えている伊織。

伊織「あんたは好きなことに裏切られるのが怖いだけなんだよ！」

*
実玖「……いや、でも漫画と育児の両立なんて少女日記の一卷に手を伸ばす実玖。
葛藤したのち、結局読み始める。」

*

10巻を読みながら感動している実玖。

実玖「やっぱり大人になってもいい話過ぎる」

漫画を閉じ、ふうと深呼吸する。

実玖「（何かを決意したように）：よし！」

赤ちゃんの泣き声が聞こえてくる。

実玖「はいはい、今行きますからねー！」

書齋を出ていく実玖。

○プロレス教室・外（夜・日替わり）

教室の中の様子を伺っている芹奈。

その後ろから、近藤がやって来る。

近藤「あれ、この前の？」

芹奈「（驚いて）あ、こんにちは！ この間

はどうもありがとうございました」

近藤「いやいや、こちらこそどうも。で？

今日はどうしたの？」

芹奈「いや別になにか用ってことでは…」

近藤「（何かを察して）あーなるほどね。分かった。中に入りな、ほら遠慮しないで！（芹奈を無理やり中に入れる）」

芹奈「え、あ、あの…！」

○伊織の家・リビング

伊織、やけ酒に酔いしれている。

数本の空き缶が床に散らばっている。

スマホを取り出し、手持無沙汰に画面をいじっている。

芹奈に電話しようと思うが、辞める。

○プロレス教室・リングの中

派手なコスチュームを着ている芹奈、

近藤に技を決められている。

近藤「（技を決めながら）分かってきたでしょプロレスの面白さ。闘いのエッセンスが含まれた個性がぶつかる肉体表現、それがプロレスなのよ。分かるでしょ！？」

芹奈「（痛がりながら）は、はい…！」

○プロレス教室・リング外

リングの端に腰を下ろしている芹奈。

汗を拭きながら息を落ち着かせる

近藤が芹奈にペットボトルの水を渡す。

芹奈「（受け取り）ありがとうございます」

近藤「お姉ちゃん、さっきすごい顔してたよ。

目が白目になって口が大きく開いて：あ、

あれに似てたよ、あの魚！」

近藤、スマホを取り出し調べ始める。

芹奈「いや誰だってあんな技かけられたらそ

うなりますって」

近藤「（スマホの画面を見せて）ほらこれ！

メダマアンコウ！」

芹奈「…メダマアンコウ？」

近藤「そうそう、ほら！ そっくり！ ね？」

芹奈「ね？ って言われても…」

近藤「でもお姉ちゃん見た目より根性あるね。

俺のキヤメルクラッチに耐えられた女の

子初めて見たよ」

芹奈「耐えられていたかどうかは分かんないですけど……」

近藤「なに？ やってたの？ プロレス」

芹奈「いややってないです！ 見に行ったこ

とは小さい時に何回かありますけど」

近藤「へえ、そりゃいいね。誰と？」

芹奈「お父さんが好きで、家族全員で見に行っていました」

近藤「そうなんだ。今は見に行っていないの？」

芹奈「今は、そうですね。私が小学校上がって
たくらいからだんだん……。今はもう家族
あんまり仲良くなくて」

近藤「そう。俺もね、母親が早くに死んで親
父に育てられたんだけど、この親父がほ
んつとに厳しい親父で。俺の事しよっち
ゆう殴るんだよ。お世辞にも仲が良い親
子とは言えなかったね。でも、唯一親父
が俺に笑顔を見せる時があったの。それ
がテレビでプロレスを見てる時だったの
よ。だから俺は、一生懸命レスラーの名

前覚えたり、技の練習したり、親父と話を合わせるのに必死だったんだよ」

芹奈「それがプロレスを好きになったきっかけですか？」

近藤「最初はそうだったよ。でもね、プロレスは一人では絶対できないから。それが一番の魅力だと俺は思ってる」

芹奈「：どういうことですか？」

近藤「レスラーって相手の全部を受け止めてくれるの。だって、相手が仕掛けてきたのにそれを無視して全部自分勝手にやるなんて無理でしょ。リングに上がったら相手のやることすべて受け入れる。逆も然り。自分のプロレスはこれなんだって相手に体でぶつかって伝える。俺はこういう人間なんだって。自分で伝えないと誰も分からないでしょ？ それは絶対諦めちゃダメなことなんだよ。いつだって自分の事を分かっただけじゃ一人じゃ

だめだから。相手がいないとだめだから。
そういうところに俺は魅力を感じてるの」

芹奈「伝えても、分かってもらえなかったら、
その時はどうしたらいいんでしょうか」

近藤「何回でも伝えるの。分かってもらえる
まで。それが大切な人なら尚更ね。自分
の事を分かってもらうには相当時間がか
かるもの。でも大丈夫、お姉ちゃんなら
大丈夫だよ。俺のキャラメルクラツチく
らってもびくともしない人だもん」

芹奈「…それ関係ありますか？」

近藤「ははは、…ないかも」

微笑み合う2人。

○伊織の家・リビング・中

伊織、寝ながら漫画を読んでいる。

スマホから着信音が鳴る。

芹奈かと思いすぐにスマホを確認する。
しかし別の人であったため落胆するが、
着信相手を確認し「えっ」と声が出る。

恐る恐る、電話に出る伊織。

伊織「もしもし…」

○ファミレス・中（日替わり）

4人掛けのソファで伊織と実玖が向かい合っている。

伊織「この前の事は、その、言い過ぎたと…」

実玖「ありがとうございます！」

伊織「…へ？」

実玖「私、あれから色々考えて…。熊谷さんから言われたことずっと考えてたんです」

伊織「…あの、怒ってないんですか？」

実玖「そりや多少ムカつきましたけど…。でも怒るって凶星だから怒るのであって、つまり思い当たる節が私の中にあっただけのことなんだと思うんです」

伊織「深いですね…」

実玖「確かに私、逃げていたかもしれませんがそれは今だけのことでじゃなくって、学生

のころからずっと。：私、ずっと上の人間になるのが怖かったんです」

伊織「：上の人間？」

実玖「クラスの中で人気者の人間、勉強が出来るから成績上位の人間、絵が上手くて先生から期待されている人間です。上の人間になればあとは落ちるだけな気がして怖くて。だから自分はずっと下で良いやつて思っていました。それが一番自分を傷つけない方法だって信じてたんです」

手元にある水を一気に飲みする実玖。

実玖「（興奮気味で）でも！今回新人賞を取ったとき、今までの感覚と違ったんです。怖くなかったんです。私、どこまででもいいから、そう思ったんです！」

伊織「：」

実玖「熊谷さんが言ってくれたから。私、諦めないで漫画続けてみようと思いました！」

伊織「：やめてください」

実玖「：えっ？」

伊織「あれは、田村さんを想って言ったことじゃありません。自分の為です。：私は高校生から新人賞に応募し続けてもう10年くらい経ちますが未だに受賞できなかったがないんです。私が欲しくてたまらないもの、田村さんが簡単にいららないって捨てるのを見て、自分が惨めになったんです。この人は簡単に手に入れられるのに自分は何年も手に入れられていない。じゃあ私が今まで頑張ってきたのは何だったんだって。自分を真っ向から否定された気がして。ただ、自分を守りたかっただけなんです。だから：。あんな言い方して、本当にすみませんでした」

伊織「：熊谷さんって、本当に面白い人なんです」

伊織「：はい？」

実玖「そんなこと、分かっていましたよ」

伊織「え？ あ、そうなんですか：？」

実玖「それを含めて、私にとって熊谷さんが仰ってくれたことが本当にありがたかったので、今回お呼び立てしたまでです」

伊織「あ、そ、そうなんですか：（急に顔が熱くなる）」

実玖「熊谷さんって真面目な方なんですわね。

この前もあんなに怒ってたのにすっかり千円札置いていくし。（嘔き出して笑って）ドリンクバーしか頼んでないのに」

伊織「：おちよくってます？」

実玖「いいえ、おちよくってません。私、ずっと新しい自分になるきっかけが欲しかったんです。結婚して妻になったら、子供を産んで親になればなにか変わるのかもって。でも何にも変わりませんでした。私は、ずっと弱い私のままでした。でも私、本当は強くなりたいんです。弱いままは嫌なんです。私はもう31歳ですけど、まだ自分を諦めたくないです」

実玖、財布から小銭を取り出す。

実玖「これ、この前のお釣りです」

伊織「いや、大丈夫です。いらないます」

実玖「いえ受け取ってください。：今度、熊

谷さんの作品も見せてください。その、

嫌でなければ」

伊織「：まあ、見せてあげてもいいですけど」

○ 芹奈の実家・前

玄関の前で一呼吸をおく芹奈。

芹奈「ただいまー」

芹奈、玄関のドアを開けるが返答はな

く、静寂が漂う。

少し遅れて、玲子（52）が顔を出す。

玲子「お帰り。どうしたの、珍しいじゃない」

芹奈「うん。ちょっと、近く寄ったから」

玲子「そう。ご飯食べてく？」

芹奈「うん、ありがとう」

○ 同・リビング

玲子、芹奈、ダイニングテーブルにつ
き夕食を食べている。

芹奈「歩は？ 元気にしてる？」

玲子「相変わらず引きこもってるわ」

芹奈「そっか。でも元気ならよかった」

玲子「飽きもしないで、大学にも行かずずつ
と部屋にこもつきり。何してるんだろ
うね。芹奈は普通に働いて偉いわね」

芹奈「…」

箸をおく芹奈。

玲子「…芹奈？ もう食べないの？」

芹奈「お母さん、私ね」

玲子「何？」

芹奈「私ずっと普通ってどういうものか分か
らなかった。お母さんは私のこと普通だ
とってたかもしれないけど、私は自分
のこと普通だと思ったこと一度もないの」

玲子「何言ってるの。芹奈はちゃんと…」

芹奈「（食い気味で）今日は、お母さんに本
当の私をみてほしいの」

芹奈、席を立ち、服を脱ぎ始める。

玲子「ちよつと芹奈？ どうしたの！？」

服を脱ぐと、そこにはプロレスのコス

チュームを着ている芹那が立っている。

玲子「えっ？ その恰好、どうしたの？」

芹奈「（無視して）私自分がまともだって思ったこと一度もない。いつも自分の考えていることは人と違ってて、みんなが考えてることの大半を私は理解できなくて」

芹奈の恰好が気になり話が入ってこないという様子だった玲子、少し落ち着いて芹奈の話に耳を傾けている。

芹奈「私、なんで自分が生きているのか分からなかった。もう25歳になるのに目的なくこの世界で生き続けるのがずっと怖かったの。お母さんにはこの気持ち分からないと思うけど、私はそんなことを考えてしまう人間なの。全然、普通なんかじゃない。でも、それが私なの」

玲子「芹那…」

芹奈「理解してほしいとは思わない。けど、知ってほしいの、私の事も、歩の事も」

○同・子供部屋

渡井歩（22）、…と、持っていたクッションを強く握りしめる。

○同・芹奈の部屋（夜）

芹奈、ベットに横になり、寝ようとするが寝付けない。

ふと、棚にある一枚の紙に目が行く。紙を確認すると、小学生の頃に書いた将来の夢をテーマにした作文だった。

芹奈「懐かしいな。こんなの書いてたな」

芹奈、読みながら時々吹き出して笑う。

芹奈「私、この時から何も変わってない。捻くれてて、つまらなくて、何かあればすぐに逃げ出してた」

芹奈、作文の文字を指でなぞる。

芹奈「…けど、楽しかったんだよな」

スマホを確認するが伊織からの返信はない。

芹奈、伊織にLINEを打ち始める。

「伊織、久しぶり。」と打って、違うな、と思い、消す。

「伊織、あの時はごめんなさい。」と打ってまた違うなと思い、消す。

ふと机に目をやりペンと紙を取り出す。机に座り、伊織に手紙を書く芹奈。

手紙を読む芹奈の声「拝啓、熊谷伊織様。お元気ですか。あの日から、何日も経つけどまだあの日伊織が言ったこと、私はずっと考えています」

○同・玄関外（日替わり）

玲子に別れを告げ玄関を出ていく芹奈。立ち止まり、外から歩の部屋の方向を振り返るが、外からは歩の姿を確認できない。
再び歩き出す芹奈。

○道中

顔を上げて歩いている芹奈。

手紙を読む芹奈の声「伊織はまた怒るかもしれないけど、私はずっと伊織が羨ましかった。やりたいことを見つけて前に進んでいる伊織が、ずっと羨ましかった。いつか私にも人生をかけてもいいと思えるものに出会えたら、それはどんなに素敵なことだろうかと思います。でも私には、まだまだ見つけられそうにありません」

○伊織の家・中

部屋の中は空になっており、伊織、引っ越しの準備をしている。

スマホから着信音が鳴る。

伊織「あ、田村さん？ 今終わりました。い

え、駅まで行きますよ。大丈夫です」

と、外出する準備を始める。

手紙を読む芹奈の声「実は最近、面白い人に出会いました。私の事をメダマアンコウみたい、と言ってくる人です。メダマアンコウは、お世辞にも可愛いとは言えない魚で、女の子にそんなことを言うてるなんて相当失礼な人だと思います」

○駅前

実玖が待っており、そこに伊織が大量の漫画が入った袋を持ってやって来る。

実玖「すみません！ 重かったですよね？」

伊織「（息を切らして）大丈夫です。もらったもらったほうがいいので」

実玖「本当に全部貰ってもいいんですか？」

伊織「はい。貰ってください」

何かを言いたげな様子の実玖。

伊織「田村さん？」

実玖「…漫画、やめちゃうんですか？」

伊織「…辞めたいです。きっと辞められないんです。キッパリ辞められたらいいのに、

（笑って）夢を持ちちゃった人間の末路
ですかね。でも、こんな25歳も悪くな
いよなっと思えます。これから本当に描
きたいもの、もう一度考えてみます。知
らない土地で、知り合いもない街で。
（お辞儀して）では」

去っていく伊織。

足取り軽い伊織の背中を見つめる実玖。
手紙を読む芹奈の声「その人はプロレス教室
の講師で、私がプロレスの絞め技を掛け
られている時の顔がなんともメダマアン
コウに似ているんだそうです」

○実玖の車・中

運転席に乗り込む実玖。

隼人、赤ちゃんをあやしている。

隼人「ねえちよっと、泣き止まないんだけど」

実玖「（ぼんやりして）……」

隼人「ねえ？ 聞ってる？」

実玖「（はっとして）あ、え？ 何？」

隼人「だから、泣き止まないんだって、どうにかしてよ」

実玖「…どうにかしてってことはないでしょ」

隼人「は？ 何？」

実玖「あんたと私の子供なのよ。あんたがどうにかしてやんなくてどうすんのよ」

隼人「え、実玖…？」

実玖「あんたのその甘ったれた精神、今日からに徹底的に叩き直してやるから、覚悟しなさいよ」

隼人「（怯えて）え、あっはい…」

○伊織の家・前

引っ越しのトラックが来ており、荷物の搬入作業が行われている。

○駅・改札前

改札から出てくる芹奈。

歩いて伊織の家まで向かう。

手紙を読む芹奈の声「でも私はそんな顔にな
っている自分が何故か誇らしかったんで
す」

○伊織の家・前

トラックに、引越し業者が乗ってお
り、伊織も続けて乗り込む。

○道・トラックの中

トラック、信号待ちをしている。

伊織、目の前の交差点を渡っている芹
奈に気づき、思わず、あ、と声が出る。

引越し業者「どうしました？ 止めますか？」

芹奈を目で追う伊織。

芹奈の表情は明るく足取りも軽い。

手紙を読む芹奈の声「必死に自分と戦って
くる人がいる。それに自分も負けじと向
き合おうとしている。そのことがなんだ
かとっても、とっても嬉しかったんです」

伊織「（引越し業者に向けて）いえ…」

信号が青になり、トラックは発進する。

○道中

明るい表情の芹奈、歩いている歩幅が
だんたん大きくなり、走り始める。

手紙を読む芹奈の声「お互いを分かり合うと
いう事は簡単のようでとても難しい事の
ように思います。けれどそれは諦めては
いけないことなんだと私は今そう信じて
いるのです」

○トラック・車内

引越し業者「本当に良かったですか？ 止め
なくて」

伊織「…（笑って）大丈夫です、きっと。私
が思ってるより、あいつは強い奴なので」

○伊織の家・前

部屋のポストに手紙を入れる芹奈。

手紙を読む芹奈の声「私はまだ、きっと色んなことが分かかっていない。まだなににもなれていない。でもそんな何もない私が、今はとても面白いと思えるのです。こんな私ですが、また、友達になってくれませんか？」

○トラックの車内

外をみながら、微笑む伊織。

○芹奈家・芹奈の部屋

机の上に、芹奈が小学生の時に書いた将来の夢の作文がある。

手紙を読む芹奈の声「追伸、今度一緒にプロ

レスを観に行きませんか？」

作文に、赤色のペンで大きく、「私はメダマアンコウになりたい」と書かれています。

メインタイトル『私は、メダマアンコウになり
たい』